

# 被災父子家庭 支援よう



震災復興の視点から、本県の父親支援策について意見交換する汐見稔幸白梅学園大学長（左）ら

白梅学園大（東京）の汐見稔幸学長を助言者に、宮古市を中心には絵本読み聞かせの活動などをしている「おどつつくんS」の前川克寿さんや、一人親家庭

白梅学園大（東京）を支援するNPO法人  
の汐見穂季学長を助言 インクルいわての山屋

盛岡のシンポから

OSにすぐ対応を

楽しむ育児観を持つて

の善意を届けられる立場にいたことが、災害による無力感を和らげたように思う」と話した。山屋さんは、子どものセレモニー用のレンタルスーツの貸し出しや一人親家庭の交流会など、同法人の父子家庭支援策を紹介しSOSがあれば対応しなければな

の研修会や子育て支援プロジェクトなどを本県での「東日本大震災父子家庭十日町」について説明し、「は困っている」と

ら、本県の父親支援策について  
幸平白梅学園大学長（左）ら  
た。

る中、子  
きかー。  
当者らが  
ウム」の  
理恵さん、NPO法人「り組んでいる」とな  
新座子育てネットワー  
ク（埼玉県）の坂本純  
子さんらが事例発表し  
た。 前川さんは、震災後  
に避難所でのおはなし  
会や全国から発送され  
た絵本の配布などの活  
動について「人のため  
に働いたり県内外から  
お父さん支援員のため

庭はさまざまなもので  
性に囲まれており「被  
災児の生育環境が危  
機的状況になる」ことを  
はらんでいる」と懸念。

ら明治時代初めの日本の父親は育児に熱心だったが、その後の近代化の中で育児から切り離され長時間労働の現場で働くようになつたことを文献を交えて説明。「お父さん支援は、もともと我々の歴史の中には子育て好きのスイッチを入れることが大きなテーマ。父親の育児という特別なものがあるのではないか」と、子どもの生活を楽しむことが一番大事だという育児觀を持つてもらいたい」と話した。

汝見さん自身の子育て体験を交え、「育児をして失ったものは何もない。子どもの成長に関わるのは人生で一番の喜び。やらないのはもったいない」とエールを送った。

東日本大震災で団らすむ父子家庭になつた人もいる中、子育てで父親が抱える問題や支援の方法はどうあるべきか。盛岡市でこのほど開かれ、専門家や支援者、行政担当者らが意見を交わした「岩手の父親支援のためのシンポジウム」の詳報を伝える。

理恵さん、NPO法人り組んでいることなど 新座子育てネットワー ク（埼玉県）の坂本純子さんらが事例発表した。

前川さんは、震災後に避難所でのおはなし会や全国から発送された絵本の配布などの活動について「人のためには働いたり県内外から

しむ育児観を持つて

の善意を届けられる立場にいたことが、災害による無力感を和らげたように思う」と話した。山屋さんは、「子どものセレモニー用のレンタルスーツの貸し出しあり、一人親家庭の交流会など、同法人の父子家庭支援策を紹介した。

県によると、東日本大震災で一人親となつた子どもは488人。このうち、父子家庭は約半数を占める。県として、遺児家庭支援専門員の配置や経済的支援制度の周知などに取

庭はさまざまに弱性に囲まれており「被災遺児の生育環境が危機的状況になる」ことを懸念。はらんでいる」と懸念。お父さん支援員のため

いるために、父子家庭は離され長時間労働の現場で働くよつになつたことを文献を交えて説明。「お父さん支援は、もともと我々の歴史の中につたが、その後の近代化の中で育児から切り離された育児という特別なものがあるのではないか」というスイッチを入れるところが大きなテーマ。父親の育児という特別なものがあるのではなく、子どもと生活を楽しくしむことが一番大事だという育児観を持つてもらいたい」と話した。

汐見さん自身の子育て体験を交え、「育児支援プロジェクト」にして失つたものは何について説明し、「男性は困っていることを伝えるのに抵抗があり、SOSがあればすぐに応じなければならぬ」とい。今日の前の苦労や悲しみをどう越えていくかは子どもたちが見ていた。その子が父母になって、そのときにモデルにしていくものだ」と強調した。

汐見さんは、江戸か

新座子育てネットワー ク（埼玉県）の坂本純子さんらが事例発表した。

前川さんは、震災後に避難所でのおはなし会や全国から発送された絵本の配布などの活動について「人のためには働いたり県内外から

しむ育児観を持つて

の善意を届けられる立場にいたことが、災害による無力感を和らげたように思う」と話した。山屋さんは、「子どものセレモニー用のレンタルスーツの貸し出しあり、一人親家庭の交流会など、同法人の父子家庭支援策を紹介した。

県によると、東日本大震災で一人親となつた子どもは488人。このうち、父子家庭は約半数を占める。県として、遺児家庭支援専門員の配置や経済的支援制度の周知などに取

庭はさまざまに弱性に囲まれており「被災遺児の生育環境が危機的状況になる」ことを懸念。お父さん支援員のため

いるために、父子家庭は離され長時間労働の現場で働くよつになつたことを文献を交えて説明。「お父さん支援は、もともと我々の歴史の中につたが、その後の近代化の中で育児から切り離された育児という特別なものがあるのではないか」というスイッチを入れるところが大きなテーマ。父親の育児という特別なものがあるのではなく、子どもと生活を楽しくしむことが一番大事だという育児観を持つてもらいたい」と話した。

汐見さん自身の子育て体験を交え、「育児支援プロジェクト」をして失つたものは何について説明し、「男性は困っていることを伝えるのに抵抗があり、SOSがあればすぐに応じなければならぬ」とい。今日の前の苦労や悲しみをどう越えていくかは子どもたちが見ていた。その子が父母になって、そのときにモデルにしていくものだ」と強調した。

汐見さんは、江戸か